

日本古代印研究

その歴史的・時系列的展開と律令国家の本質

Ancient Seals in Japan and the Essential Points of
Ritsuryō Government

久米雅雄

はじめに

① 日本古代印の研究史

② 日本古代印研究

③ 「隋唐印」との関連性について

④ 「日本古代の印章」と「律令国家の本質」

まとめにかえて

【論文要旨】

本稿においては『日本古代の印章と律令国家の本質』のテーマで「印章」の有するさまざまな機能のうち、特に「権力の表象」としての「印章」が「古代律令国家」の統治原理の中でどのように制度的に受容され、発展し、変質していったのか、そのプロセスを文献史料や実物資料（古書押捺印影・伝世印・出土印）を通して明らかにするとともに、その歴史的要因や歴史における表象のもつ意味を解明することを目的とする。

論の構成としては、先ず江戸時代中期以来に始まった日本古代印の「研究史」をふりかえり、特に「印影」を中心とする「平面的研究法」の到達点を確認する。その上で日本古代印研究のための従来の「方法論」を再吟味し、特に「伝世印」および「出土印」を中心とする「考古学的方法」に基づいて、「型式学的方法」の有効性と限界性なども考慮にいれつつ、材質・鈕形・印文・法量・官私印の別などに注目しつつ、「日本古代印の編年体系」を試みる。これにより「律令国家」の統治原理の中で表象としての「印章」の果たした役割およびその変遷が明らかとなり、「国家構造」そのものの変質も明らかになる。

また「日本古代の律令印制」は従来「中国の隋唐印制」の影響下に成立したと言われてきたが、それを実物資料に基づいて検討し、その結果、中国からの受容部分と我が国における独自創出部分、そしてその後の国風の発展部分とが明らかとなる。

その「国風の発展」に平行して「国史」をひもとくと9世紀後半あたりから「印面の摩滅」を理由とした「国印の改鑄」記事が顕著になる。但し実物銅印は「蠟型技法」で鑄造されており、「印文」の鑄出はきわめて高く、もはや使用に耐えられないほど摩滅はしないし、その実例も見ない。「国司」の変質が実はその「美麗な文字」の下に隠されており、「日本古代印研究」は「文献史料」とは異なった位相で「歴史の真実」を紡ぎだす。